廣田遺跡

鹿児島県南種子町教育委員会

INDEX

第Ⅰ章　広田遺跡の概要	1
第Ⅱ章　発掘調査の成果	3
1957-1959 年度の調査概要	3
2005-2006 年度の調査成果	10
地中レーダー調査の成果	21
出土人骨の調査成果	23
第Ⅲ章　出土遺物	25
第Ⅳ章　まとめ	31

例　言

1. 本概要報告書は、南種子町教育委員会（以下、町教委）が国庫補助事業として平成 16 年度～平成 18 年度にかけて実施した町内遺跡等発掘調査事業の成果の概略をまとめたものである。
2. 上記調査の正式報告書は、平成 19 年 9 月に刊行されている。
3. 本概要報告書に収録する 2005-2007 年度発掘調査に関する遺物・発掘調査記録は、町教委で保管している。
4. 本概要報告書の編集は、町教委が行い、石堂和博・徳田有希乃が担当した。
5. 本概要報告書の執筆は、石堂が担当した。
6. 写真 2 ～ 14 は、鹿児島県歴史資料センター黎明館より提供をうけた。
7. 表紙の題字は金関丈夫による。

砂丘に眠る美しく装った人々

今から 1700 年前、種子島の広田に、
絡み合う帯状の文様を彫刻した美しい貝製品で身を飾る人々がいた。
彼らは、1955-1957 年に広田砂丘から掘り起こされ、
研究者によって、「広田人」と呼ばれた。

1958年度　調査風景

2005年　南側墓群調査風景

2005年　北側墓群調査風景

写真1　広田遺跡航空写真

種子島の自然環境と歴史的な環境

広田遺跡がある鹿児島県熊毛郡南種子町は、種子島の南部に位置する。

種子島は、面積 447.09㎢、南北 52㎞、東西 12㎞、最高海抜 282.3 mの低平な島で、本土最南端の佐多岬から南東約 40㎞の洋上に位置する。亜熱帯性自然の北縁部にあたり、黒潮の流路部に位置し、サンゴ礁の北限地で、海浜砂丘が良好に発達する。

国分直一は、琉球諸島を、考古学の視点から大きく三つの文化圏に分けている。九州本土の文化の影響を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を北部圏、南九州の影響を受けつつも独自の土器文化圏を発達させた地域（奄美諸島・沖縄諸島）が中部圏、日本文化の影響が殆ど及ばず台湾・フィリピンなどの強い南方文化が特色の地域（先島諸島）が南部圏である。

北部圏に位置する種子島で、弥生時代から古墳時代にかけて、本土にみられるような墳丘墓、古墳はみつかっていない。弥生時代後期後半から古墳時代併行期にかけての種子島では、海岸砂丘上に墓地が形成されるのである。これらの墓地には、覆石墓と呼ばれる種子島独自の墓がつくられる。広田遺跡にも覆石墓は存在するが、それ以外の墓制も多く、貝符や竜佩型貝製垂飾など、豊富で多彩な貝製装身具を身につける独特の文化が確認されている。

台風により現れ出た広田遺跡

広田遺跡は、種子島の南部、東海岸に面した全長約 100 メートルの砂丘上に立地する墓地遺跡である。砂丘の最も高い地点は海抜約 9m で、砂丘北側を広田川が東流し、海に注いでいる。

1955（昭和 30）年、台風 22 号に伴う波浪により、海側に面した砂丘東側の一部が崩壊したため、人骨や貝製品が露出し、発見された。

広田遺跡は、1957（昭和 32）年から 1959（昭和 34）年まで 3 次にわたって、国分直一・盛園尚孝・金関丈夫氏らによって、発掘調査が実施されており、いくつかの報告がなされ、この遺跡が特徴的な習俗を持つ人々の墓地であることから、全国的に注目を浴びた。2003 年度には、広田遺跡学術調査研究会によって、調査の全容を説明した詳細な報告書が刊行された。

2004 年度から 2006 年度にかけて、町教委は、遺跡の保護を目的とした範囲確認調査を実施した。その調査成果の概要をまとめたものが、本概要報告書である。

2004 年度の発掘調査は、広田遺跡周辺の調査を主眼とし、広田人の生活址を明らかにすることを目的としたが、広田遺跡と同時期の生活址は発見されなかった。

2005-2006 年度の発掘調査は、広田遺跡の墓地そのものの範囲確認を目的とした調査である。この調査で砂丘北側で新たに墓群が発見され（北側墓群）、従来から知られていた砂丘の南側の墓群（南側墓群）も、その範囲が拡大することがわかり、広田砂丘には多くの埋葬遺構が残存することがわかった。

第 1 図　広田遺跡の位置

1957-1959 年度の調査概要

多彩な貝のアクセサリーで身を装った人々が、砂丘には埋葬されていた。

2005-2006 年度の発掘調査の成果を報告する前に、1957-1959 年度の広田遺跡の発掘調査の概要についてまとめたい。

第 1 次調査（1957 年）は、盛園尚孝・国分直一氏らによって砂丘南側に第 1 トレンチ（2.5 m× 10.0 m）、砂丘北側に第 2 トレンチ（2.0 m× 4.0 m）、第 3 トレンチ（1.0 m× 4.5 m）を設定し行われた（第 3 図）。砂丘南側では、黒色砂層中で埋葬遺構が検出された。埋葬遺構は層位的に把握され、主に上層と下層に分けられている。

砂丘北側からは弥生時代中期前半の入来Ⅰ式、入来Ⅱ式土器及び多数の貝類、獣骨・魚骨が出土する貝塚が確認されたが、当時の調査では、埋葬遺構は確認されていない。

第 2 次調査（1958 年）は、第 1 次調査のメンバーに、金関丈夫・永井昌文・森貞次郎・三島格氏らを加えて実施され、第 3 次調査（1959 年）では、さらに金関恕・井関弘太郎氏らが加わっている。

第 2 次・第 3 次調査は、第 1 次調査で埋葬址が確認された第 1 トレンチ（2.5 m× 10.0 m）を中心に、東西南北に調査区を拡張することで、埋葬址の広がりと内容を確認する事を目的としている。第 2 次調査では主に南北に、第 3 次調査では主に東西に調査区を拡張している。

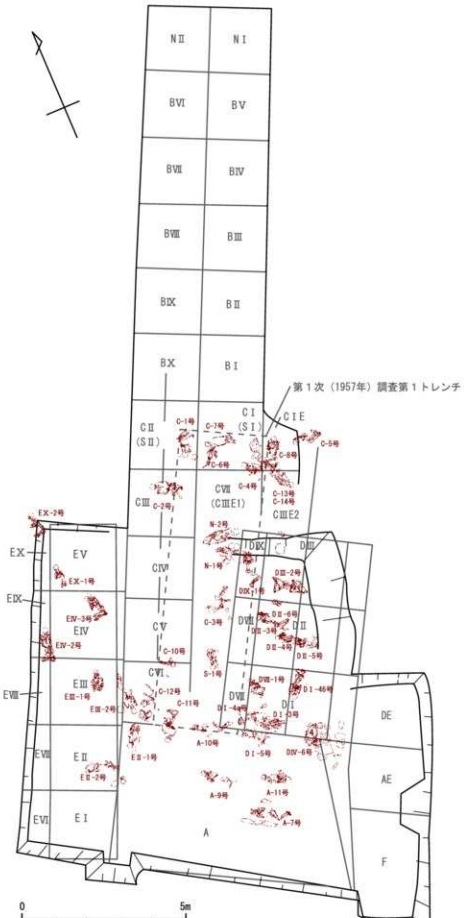
第 2 次調査では、第 1 トレンチの南側に A 地区（5.0 m × 4.4 m）、北側に B 地区（4.0 m× 12.0 m）を設定し、また、第 1 トレンチの西側の状況を明らかにする目的で A・B 地区を連結する C 地区、第 1 トレンチの東側に D 地区（3.0 m× 8.0 m）を設定している。

第 2 次調査で設定された全ての地区で埋葬遺構は確認されたが、北側に設定された B 地区では、B 地区南側で埋葬遺構が確認されたが、北側では、魚・獣骨を含む貝溜りと鉄製釣針、滑石製石鍋などが出土したが、埋葬遺構は確認されていない。

第 3 次調査では、第 2 次調査で設定した調査区の更に西側に E 地区（10.0 m× 3.0 m）、東側に F 地区（ほぼ 4 m × 2 m）を新たに設定し、調査を行っている。埋葬遺構は調査区全てで確認されている。

3 次にわたる発掘調査の結果、弥生時代～古墳時代併行期にかけての合葬を含む 90 箇所の埋葬遺構と、多彩な貝のアクセサリーをみにつけた人骨を含む、総数 157 体の人骨が確認された。

写真 2　1957-1959 年度の調査地点



第２図　1957-1959年度調査　下層期埋葬遺構配置図

1957-1959 年度の調査で、埋葬遺構は、上層と下層から出土している。また、下層は、下層期・新段階と下層期・古段階に細分され、埋葬の時期は以下とされた。

上層期（上層）：古墳時代後期（7 世紀を含む）
下層期・新段階（中層）：古墳時代中期
下層期・古段階（下層）：弥生時代後期後半～古墳時代前期

上層期の埋葬遺構は、大型の方形石囲い内で検出された二次葬で、焼骨層を伴っている（写真 3）。

一方、下層期の埋葬遺構（写真 4）は、一次葬の単葬埋葬を主とし、下層期・新段階には、一部 2 体以上の合葬もみられ、一次葬と二次葬が混在する。

出土人骨は、全員が過短頭で生活習俗などによる人工的な変形が加わったと想定されている。身長は男性が 154.0 ㎝、女性が 142.8㎝であり、低身長の点では日本列島の古代人では例を見ず、上顎片側の側切歯を抜歯する特異な風習を持つ。また人骨に伴って、総数 44、242 点、総量約 24kg にも及ぶ、夥しい量の貝製品が確認されている。出土した貝製品の大多数は、人骨が身につけていた貝製装身具（貝のアクセサリー）であった。

1957-1959 年の広田遺跡発掘調査の中心的な役割を果たした国分直一氏や金関丈夫氏などは、貝製装身具の一つである、貝符に刻まれた文様が、中国古代の青銅器や玉類に施文される饕餮文などに類似することや、写真 10 の「山」と刻まれた貝符の存在から、中国大陸の文化の影響を指摘した。

また、国分氏は、広田で貝製品が多用されるのは、中国の秦・漢代の玉製品にみられる遺体を飾玉の呪力で守る思想が影響しているとし、下層貝符や竜佩型貝製垂飾（写真 9）から、広田の文化の源流が華南沿岸に求められる可能性を指摘している。

写真 3　上層埋葬（石囲いの中に集骨されている）

写真 4　下層埋葬（一次葬）

新田栄治氏は、下層貝符の文様は、饕餮文ではなく、中国の戦国時代から漢代の蟠螭文に代表される龍文に系譜がひけるとしている。

一方、中園聰氏は、いわゆる「山字貝符」は、山という文字ではなく、貝符の文様の一部であるとし、また、中国大陸に系譜がひけるとされる貝符の文様をはじめ、広田の文化は、中国大陸の文化的な影響を受け発生したものではなく、在地の伝統文化から生まれうるものだと主張した。

木下尚子氏は、下層期における広田人の装身習俗を、【貝符・小貝玉型】と【貝輪・大貝玉型】の二種類に大きく分類し、広田の貝文化について言及した。

【貝符・小貝玉型】の装身習俗は、多種の玉類をもち、これと方形、あるいは竜形や動物の形をした板状の玉（ぎょく）製品を組み合わせて使用する中国華北地域の装身様式に共通することや、貝符は、高い彫刻技術と洗練されたデザインがあってこそ、また小玉は大量生産技術があってこそ登場しうる装身具であり、その技術・デザインともに当時の日本列島の伝統文化に類例をみつけることはできないことから、【貝符・小貝玉】型の装身習俗を、中国大陸に系譜をもつ文化とみるのが妥当だとしている。

これに対し【貝輪・大貝玉型】の貝輪と大型玉類は、伝統文化に類例をみつけることができ、在地の伝統文化の中で生まれうることを指摘している。

写真5　A地区4号人骨

写真6　ゴホウラ貝輪

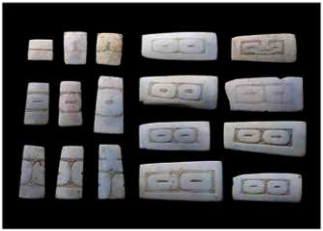


写真7　上層出土の貝符

写真8　オニニシ貝輪、ゴホウラ貝輪と貝玉類

ここで、木下尚子氏が分類した【貝符・小貝玉型】と【貝輪・大貝玉型】の装身習俗をもつ、典型的な人骨を紹介したい。

写真 11 の人骨は、広田遺跡以外では、ほとんど出土例がない独特の貝製装身具（写真 9）で身を装っている典型的な【貝符・小貝玉型】の人骨である。木下尚子氏は、彼の装いのあり方を、中国大陸に系譜をもつ文化とみるのが現時点では、妥当であるとしている。

写真 11 の人骨は、【貝輪・大貝玉型】に分類される典型的な人骨である。貝輪と大型玉類で身を装う習俗は、日本列島の伝統文化に類例をみつけることができることから、【貝輪・大貝玉型】の装身習俗は、在地の伝統文化の中で生まれうると指摘している。

写真 9　下層貝符、竜佩型貝製垂飾と貝玉類
写真は、【貝符・小貝玉型】を代表する貝製品の集合写真である。四隅が張り出した板状の貝製品が下層貝符、勾玉状の貝製品が竜佩型貝製垂飾である。

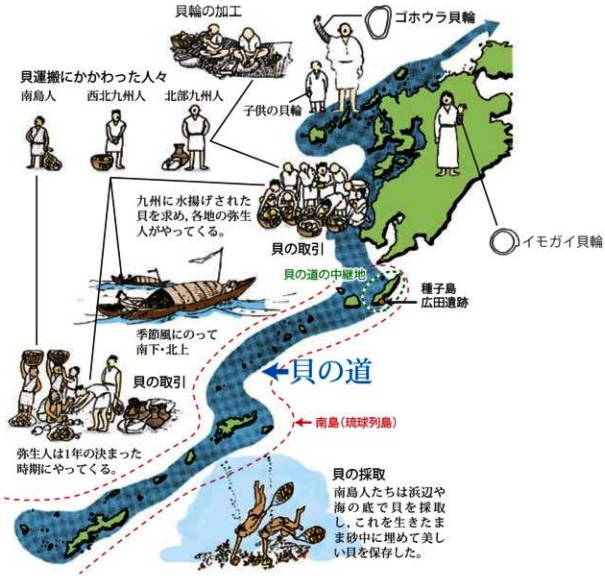
写真 10　山字貝符
この貝符に刻まれた模様が、「山」の文字だとする学説と、文様であるとする学説がある。

写真 11　D Ⅲ-2 号人骨（男性、貝符・小貝玉型）
写真は、金関丈夫氏によって「双性のシャーマン」とよばれた人骨である。また、この人骨は木下氏の分類の【貝符・小貝玉型】の装身習俗をもつ典型的な人骨である。

写真 12　A 地区 11 号人骨（貝輪、大貝玉型）
写真は、典型的な【貝輪・大貝玉型】の装身習俗をもつ人骨である。

写真 13　オオツタノハ貝輪

写真 14　マクラガイ珠
写真 13・14 は、【貝輪・大貝玉型】を代表する貝製装身具である。



第３図　貝の道　模式図　（木下尚子 1996「南島貝文化の研究・貝の道の考古学」（財）法政大学出版局収録の原図を一部改変して作成

広田人が身につけていた貝製装身具の多くは、奄美・沖縄諸島のサンゴ礁で採取されたとされるイモガイ・ゴホウラといった南海産大型巻貝でつくられている。これら大型で色彩豊かな南海産の大型巻貝は、その美しさと希少さから、古くより交易品として珍重されていたらしい。

南海産大型巻貝をめぐる交易は、弥生時代の初め頃に、北部九州の農耕社会で、これらの貝で腕輪をつくる文化が生まれたことをきっかけに、北部九州と南島との間で本格化した。弥生・古墳時代を通じてつづいたこの交易路を、研究者は「貝の道」とよんでいる。この時代、南海産の大型貝類の消費地は、北海道にまで及び、権力者達は、自らの力を誇示する財物として、南海産の貝を素材やモチーフとする多様な装飾品をつくった。

南島の北端に位置する種子島は、貝の採取地としてではなく、島づたいに結ばれた「貝の道」の交易の中継地としての役割を果たしていたと考えられているが、弥生時代後期後半から古墳時代併行期にかけては、広田遺跡で独特の貝製装身具を身につけた夥しい数の人骨が出土していて、南海産大型巻貝の一大消費地であったことがわかっている。木下尚子氏は、この広田の貝文化は、日本本土や奄美・沖縄の文化に少なからぬ影響を与えたと評価している。

2005-2006 年度の調査成果

新たな墓群が発見された。

1957-1959 年度の調査では、墓地は砂丘の南端でのみ発見され、砂丘の北側では弥生時代中期の小貝塚は確認されたものの、墓地は確認されなかった。

しかし、2005 年 2 月、地元の考古学者である鮫島安豊氏によって、砂丘北側の崖面でオオツタノハ貝輪と人骨が発見され、砂丘北側にも墓地が存在することが明らかとなった。この砂丘北側は、広田川に面するため、台風災害などの際に、氾濫した広田川と高潮による波浪によって侵食を受けやすい。そのため町教委では、2005-2006 年度に遺跡の保護を図るための範囲確認調査を実施した。

調査にあたって、まず砂丘の主軸に沿って 10m × 10m を基本とするグリッドで調査区を設定した。その後、砂丘の北側を北区、南側を南区、西側を範囲確認調査区と呼称し調査を実施した。

第 4 図　広田遺跡の範囲図

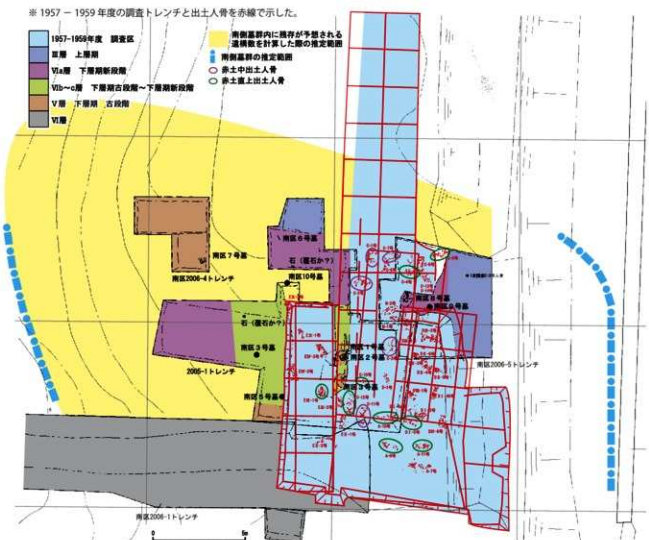
1 南区の調査

南区は、1957-1959 年度の発掘調査で確認された砂丘南側の墓群（南側墓群と呼称）の残存状況と範囲、及び当時の調査地点を明らかにするための調査区である。

調査は、2005-2006 年度に行い、新たに 11 基の埋葬遺構を確認した。

また、下図のとおり、1957-1959 年度の調査区の位置の復元に成功し、当時の調査区より更に西側に墓域が広がることをたしかめた。

1957-1959 年度の調査区の西側に設定したトレンチでは，Ⅳ層から 3 基，Ⅴ層から 1 基，また東側に設定したトレンチではⅢ～Ⅳ層から 2 基の埋葬遺構を確認した。さらに，当時の調査区内に未調査地点があり ,4 基の埋葬遺構を確認した。また ,1959 年に調査済みの EX 地区 2 号人骨の墓壙下部が未調査のまま残存していることがわかった。今回の発掘で確認できた埋葬遺構は 11 基である。



第 5 図　南側墓群　遺構配置図と墓群の範囲図

写真 15　南区 2005-1 トレンチ

南区の発掘調査における基本層序は、以下のとおりである。
なお、今回の調査は、遺跡の範囲確認を目的とした調査であるため、遺構の調査は、一部行ったのみである。

表土層、攪乱層

灰黄褐色砂層（10YR5/2）

褐灰色砂層（10YR1/5）　上層期の文化層。南区 10 号墓は、本層中から確認された。

黒色砂層（10YR2/1）下層期の文化層である。
色調等によって、Ⅳ a、Ⅳ b、Ⅳ c 層に細分できる。
南区 1、3、5、6 号墓は本層に属する。

褐色粘質砂層（10YR4/4）下層期・古段階の文化層である。
南区 2 号、南区 7 号墓が本層に属する。貝殻片を含む。

赤褐色粘質土層（7.5YR4/4）縄文時代後期・晩期の文化層である。

暗褐色粘質土層（10YR3/3）無遺物層。

写真 16　南区の標準土層

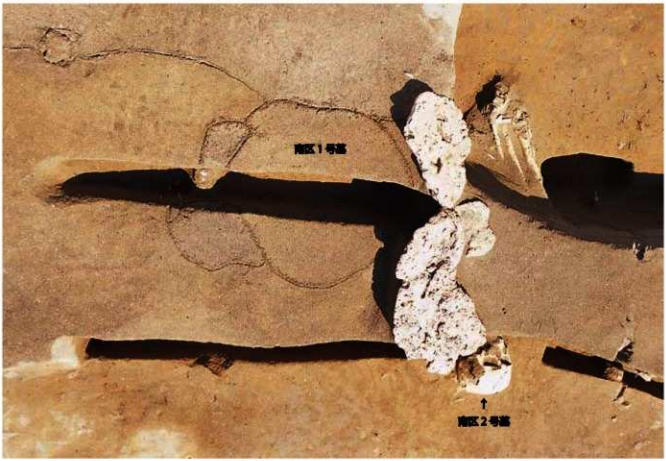


写真 17　南区１号墓（1～2才の幼児の墓）

南区１号墓：Ⅳ層下部　下層期

1～2才程度の乳幼児が埋葬された墓である。残された骨の多くが歯であった。ガラス小玉 24 点、イモガイ珠 165 点が出土した。遺構の時期は、南区２号墓との切りあい関係（南区２号墓を南区１号墓が切っている）から、下層期・古段階の南区２号墓より新しい。

本遺構から出土したガラス小玉は、大賀克彦氏に肉眼同定をしていただいた。大賀氏の編年では古墳時代中期前半に比定できるタイプのものである。

写真 18　南区１号墓　人骨、貝小玉、ガラス玉出土状況

南区２号墓：Ⅴ層　下層期・古段階

成人男性の人骨で、一次葬の単葬人骨である。仰臥で極度の屈葬。上顎左側切歯の風習的抜歯が認められる。遺構東側及び西側の一部は、第２次（1958 年）、第３次（1959 年）調査で調査されている。

遺構は、下層期・古段階の文化層であるⅤ層上面からほりこまれ、遺構下部はⅥ層に到達している。そのため、Ⅵ層中の土器が掘り起こされ遺構中に混ざり込んでいて、縄文晩期の土器が、埋土中に小破片としてみつかった。伴出した遺物は、竜佩型貝製垂飾２点、マクラガイ珠 66 点、イモガイ珠 124 点、細形ツノガイ珠 558 点、太形ツノガイ珠７点である。

また、この人骨に伴う貝製装身具は、特に写真 21 の周辺では着装時の位置をほぼ保っていて、貝製装身具の着装状況がよくわかる。

写真 19　南区２号墓

写真 20　南区２号墓　拡大１

写真 21　南区２号墓　拡大２

写真 22　南区２号墓　拡大３

写真 23　南区２号墓　拡大４

南区４号墓：　Ⅳ層　下層期　不明

南区４号墓は、遺構の一部が第２次（1958 年）調査で「C 地区 10 号人骨」として調査されている。
白骨化した人骨を集骨し、焼いて再埋葬した墓である。これまで、上層期の特徴とされてきた集骨再葬と人骨を焼く風習が下層期まで遡ることがわかった。

遺構から焼骨と、燃料として用いた木材とみられる炭化物片（20 × 15㎝）が出土し、C14 年代測定年代を行った結果、炭化物①が、２σ：120Cal AD ～ 330Cal AD で、炭化物②が、２σ：220Cal AD ～ 400Cal AD であった。

写真 24　南区４号墓

南区７号墓：Ⅴ層　下層期・古段階　成人？

大腿骨などを一部検出した他は、保存のため未調査で埋め戻した。遺構の掘り込み開始面はⅤ層上面である。

写真 25　南区７号墓

南区８号墓：下層期・新段階～上層期　５～６才児

一次葬。人骨の直上まで、過去の調査による攪乱を受けていた。残存していた遺構は未掘の状態で保存を行った。精査時に、イモガイ珠 35 点（Ⅱ類２点、Ⅲ類 33 点）、ガラス小玉２点、ノシガイ珠１点、細型ツノガイ 27 点が出土した。ガラス小玉は、大賀氏の編年によると、古墳時代中期前半のものである。

写真 26　南区８号墓

写真 27　南区８号墓出土ガラス小玉（1）

写真 28　南区８号墓出土ガラス小玉（2）

第７図　北区の遺構配置図

2 北区の調査

北区は、広田砂丘の北側墓群の範囲と内容を明らかにするために、設定した調査区で、2005-2006 年度に、発掘調査を行った。調査の方法として、通常の発掘調査に加えて、地中レーダーによる調査も行っている。

北側墓群では、覆石墓・配石墓を合計９基検出した。人骨は広田遺跡に典型的な貝製装身具を身につけていて、人骨の形質的特徴も南側墓群と共通する。また、墓に供献されていた２個体の壺が、中津野式（南九州の弥生時代終末期）であることから、北側墓群は少なくとも弥生時代終末期には、造墓がはじまっていたことがわかった。

北側墓群における地中レーダー探査では、埋葬遺構とみられる反応を複数の地点で確認し、この結果などから、未発掘区内に少なくとも 84 基以上の埋葬遺構が残存すると予想された。　発掘調査で確認された 9 基と合計すると、北側墓群全体で少なくとも 93 基以上の埋葬遺構が残存すると予想した。

写真 29 は、北区、広田川側の崖露頭である。砂丘北側でも、色調の明るい層と暗い層が互層となっているのがわかる。

写真 29　北区の層位（北側崖面土層）

Ⅰ層：表土
Ⅱ層：にぶい黄橙砂　やや粗い砂。
Ⅲ層：にぶい黄橙砂　Ⅱ層よりやや明るい。
Ⅳ層：黄褐色砂　Ⅱ層よりやや暗い。
Ⅴ層：明黄褐色砂　きめ細かい砂層
Ⅵ層：にぶい黄橙砂（混貝砂層）【弥生時代終末期】 Ⅴ層よりもさらに細かい。今回の調査で発見された北区の墓群は、この層から見つかった。
Ⅶ層：明黄褐色砂（混貝砂層）：やや粗い砂。
Ⅷ層：にぶい黄褐色砂（混貝砂層）【弥生時代中期】この層から弥生時代中前半の土器を含む小貝塚がみつかった。
Ⅸ層：にぶい黄橙砂　やや粗い砂。Ⅹ層よりやや暗い。
Ⅹ層：にぶい黄橙層　やや粗い砂。所々微小貝やアマオブネなどの貝を含む。貝溜りも見られる。しまりややあり。
Ⅺ層：にぶい黄褐色砂　やや粗い砂。
Ⅻ層：にぶい黄褐色砂　粒子の粗い白色砂を含み白みがかり、削るとザラザラする。

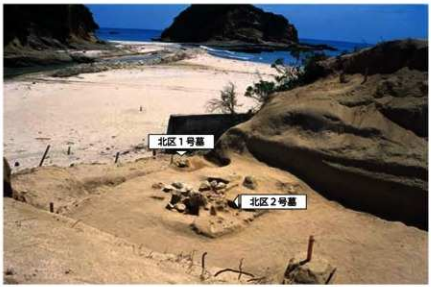


写真 30　北区 2005-5 トレンチ全景

北区 2005-5 トレンチは、北側墓群の内容をあきらかにするために設定したトレンチ（調査区域）で、Ⅵ層から 2 基の覆石墓を検出した。

北側墓群で確認された墓には、地表面に墓を示す標識（墓石）として、サンゴ塊、河原石が並べられていた（写真 30、32）。種子島の弥生時代～古墳時代併行期にみられる、こうした墓のありかたを研究者は、「覆石墓」と呼んでいる。南側墓群において、覆石墓は少数しか確認されていないことと対照的に、北側墓群の墓の大多数は、覆石墓であった。

写真 31　北区 1 号墓と腰椎付近から出土した磨製石鏃

北区 1 号墓

北区 1 号墓からは、壮年男子の人骨、彼が身につけていた貝製装身具のオオツタノハ貝輪 7 点と、副葬品のヤコウガイ容器 1 点がみつかった。また、腰椎に刃先を向けた磨製石鏃 1 点がみつかった。出土状況から、この磨製石鏃は射込まれた可能性が高く、石鏃の傷は致命傷となったはずである。

写真 32　北区 2 号墓（覆石墓、覆石上に中津野式壺を供献）

北区 2 号墓

北区 2 号墓の調査は、ごく一部を行ったのみである。この墓は、不定形の覆石中に、サンゴ塊を用いた立石を伴い、中津野式壺 2 点と在地の甕 2 点が供献され、燔火とみられる痕跡も確認された。中津野式壺から、弥生時代終末期～古墳時代初頭の埋葬遺構であることがわかった。

北区Ⅶ層の調査

北側墓群の主たる文化層であるⅥ層の下位のⅦ～Ⅷ層からは、多数の獣骨・魚骨・貝類などや、弥生時代中期の土器片、磨製石鏃、貝鏃が出土した。1957-1959 年度の調査でも同層からは、弥生中期の土器と貝塚が確認されている。

今回の調査で、弥生時代中期の小貝塚の文化層が残存することも確認できた。

写真 33　北区 2 号墓の立石と在地の甕

写真 34　北区 2006-1 トレンチ検出の覆石墓（北区 3 号墓〜北区 7 号墓）

北区 2006-1 トレンチからは、複数の覆石墓が近接して発見された。

トレンチの西壁面に、いくつものサンゴ塊がはまっていて、覆石墓が未調査区につづいていることが予想できる（写真 34）。北区 3 号墓の一部を調査したほかは、そのまま埋め戻した。

また、このトレンチ周辺で、地中レーダー探査をおこなった結果、トレンチ奥の未調査区で覆石墓とみられる反応が確認でき、この遺跡における地中レーダー探査の有効性を証明できた。

北側墓群では、埋葬遺構の墓標にサンゴ塊などの覆石をもちいるため、地中レーダー探査で反応がとらえやすい。

写真 35　北区 3 号墓人骨（小児・不明）
この遺構は、一部調査を行ったのみであるが、ノシガイ珠 4 点、イモガイ珠 2 点、ツノガイ珠 62 点が出土した。

地中レーダー調査の成果

最新の調査方法が、広田人の墓を捉えた。

広田遺跡の所在する砂丘は、保安林に指定されているため、広い面積を発掘することはできない。

そこで、北側墓群の拡がりを確認するために、宮崎県西都原考古博物館の東憲章氏とディーン・グッドマン氏に依頼し、地中レーダー調査による遺構探査を行った。

調査は平成 18 年 12 月に実施した。

まず、発掘調査で覆石墓が検出し、また、トレンチ壁面に覆石がはまっていて、未調査区に確実に覆石墓が包蔵されていると判断された北区 2006-1 トレンチ周辺で地中レーダー探査を実施した（第 9 図右上の拡大図）。探査は、表土を一定の面積と深さ重機で除去したうえで実施した。

探査の結果、覆石墓のものとみられる、幅 1 m、長さ 2 m程度の強い反応を捉えることができ、広田遺跡における地中レーダー探査の有効性を確認した。

北側墓群では、埋葬遺構の墓標にサンゴ塊などの覆石をもちいるため、地中レーダー探査で反応をとらえやすいといえる。

次に、第 8 図に示した広範囲にわたる地中レーダー探査を実施した。この広範囲にわたり行った探査では、広田砂丘が保安林であるため、地表面を重機で剥ぐことはできなかった。

探査の結果、覆石墓とみられる反応がいくつかのまとまりをもって、複数の地点で認められた。

複数の反応がみられたまとまりを、小墓群の存在であると推定し、1 群～ 10 群と呼称し、第 8 図に示した。各小墓群は、中種子町鳥ノ峰遺跡の事例から、数基～十数基の墓から構成される可能性が高いと判断し、北区には、84 基以上が未調査区に残存すると予想した。北側墓群の発掘調査で確認された 9 基と合計すれば，北側墓群に 93 基以上残存する予想となる。

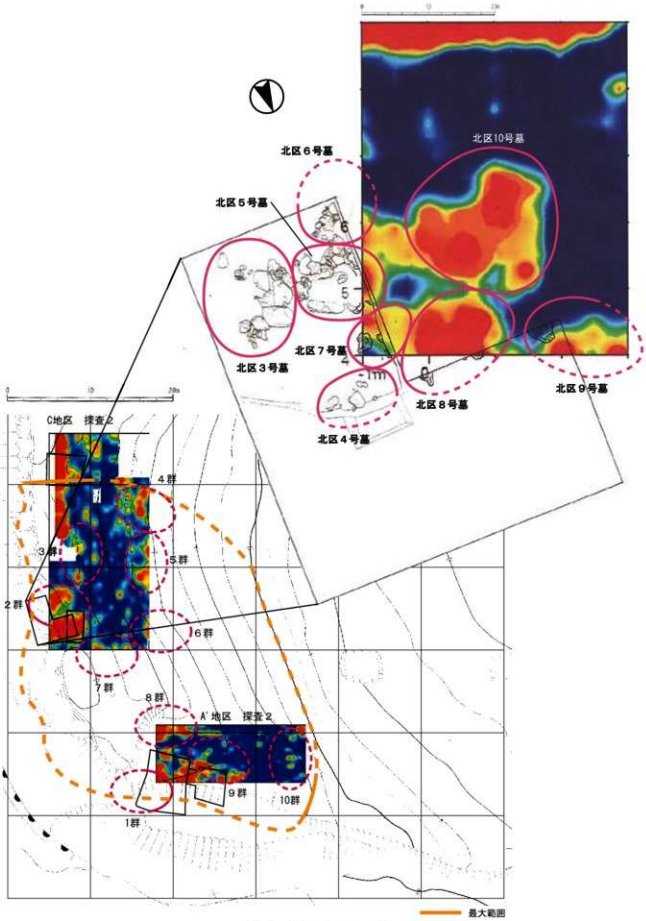
なお，南側墓群では，51 基以上の埋葬遺構が残存すると想定している。

この両者を合計すると，発掘調査で確認された埋葬遺構の数は 20 基で，地中レーダー探査の結果などから，更に 124 基以上の墓が残存する可能性が高く，総計で 144 基以上の埋葬遺構が残存すると想定した。

今回の調査で，広田砂丘の南側と北側にそれぞれ墓群が存在し、一定量の埋葬遺構が現地に残されていることがわかった。

また、広田遺跡の範囲は、2004 年度に広田砂丘西端に設定したトレンチ調査で，砂丘西端にも，弥生時代末～古墳時代にかけての包含層が存在することがわかっていることから、この砂丘全体に広がるとみられる。

写真 36　地中レーダー調査風景



第７図　地中レーダー調査の結果

出土人骨の調査成果

広田人の特異性

広田遺跡で出土した172体（1957-1959年157体、2005-2006年15体）の人骨の特徴と分析結果を、正式報告書（竹中2007、中橋2003）をもとに、以下にまとめた。

1）平均身長が男性154.0cm、女性142.8cmで、著しい低身長集団である。これは、現在の小学校5～6年生の平均身長に近く、日本列島の中で、これほど低身長の集団は、地域的にみても、他の時代にもいない。

2）写真51の南区2号墓でもみられるように、上顎側切歯、犬歯を対象にした、偏側性の風習的抜歯痕が85%の個体に認められる。こうした抜歯のパターンもまた、日本列島の中で、他の地域にもいない。

3）顔面は低顔性が著しく、低眼窩、広鼻傾向も明らかで、鼻根部の陥凹は顕著で鼻骨の彎曲も強い。顔面の平坦性が弱く、東日本縄文人やアイヌに匹敵する立体的な顔貌をもつ（写真52）。頭蓋形態小変異でも、北部九州弥生人とは大きくへだたり、縄文人などと比較的近い傾向が見られる。

4）四肢は著しく華奢である。強度の扁平性、柱状性は認められない。上肢、下肢とも、遠位部が相対的にかなり長い。

5）死亡者の中に、幼小児骨の比率が占める割合が非常に低い。

6）写真53でわかるように、広田出土人骨は、ほぼすべて、後頭部が扁平である（いわゆる絶壁頭）ことから、頭蓋を意図的に変形させる習俗をもっていた可能性が想定される。頭蓋変形の風習が立証されれば、これまで日本列島に居住した各時代・各地域の集団の中で頭蓋変形の風習を持つ初めてのグループとなる。

7）広田遺跡の南北の墓域から、2005年、2006年に新たに発見された弥生末期～古墳時代併行期の人骨も、1950年代に出土した人骨の特徴に類似し、北区と南区から出土した人骨に形質差は認められない。

8）2005-2006年度の調査で出土した3体の人骨（北区3号人骨、南区8号人骨、南区近世1号人骨）のDNA分析をした結果、広田出土人骨には、分析可能な形でDNAが遺存していることがわかり、この3体の人骨の間には、母系の血縁関係がないことがわかった。

このように際立った特徴をもつ、広田人の由来について、竹中氏は、結論は南西諸島および台湾や中国大陸など環シナ海地域の出土人骨の増加を待たなければならないとしながらも、広田の人々と同様の特徴をもつ多数の人々が居住した地域が大陸を初めとする近隣地域に確定されていないことから、現在の所、類似した特徴をややもつ本土縄文人との系統的つながりと島嶼という居住環境、生業や栄養状態の特異性などの要因が絡み合い、広田の短頭、低顔、低身長という特徴が生み出されたとの考え方もひとつの解釈として有効であるのではないかと述べている。

写真37　南区2号人骨にみられる上顎左側切歯の抜歯

写真 38　北区 1 号人骨（男性・壮年）

写真 39　北区 1 号人骨（男性・壮年）　オムスビ型をした特徴的な頭蓋

広田遺跡の最大の特徴は、「華やかな貝製装身具をみにつける独自の貝文化」にある。

1957-1959 年度の調査では、合計 44、000 点もの貝製品が出土した。

今回の調査でも、採集されたものを含めれば、合計 3、012 点の貝製品がみつかっている。また、土器 92 点、ガラス小玉 28 点、石器 15 点が出土していて、特に埋葬遺構に伴って出土した完形の土器は、北側墓群の時期を推し測るうえで、重要な発見であった。みつかった貝製品の内訳は、貝輪 19 点、貝符 25 点、有孔円盤状貝製品 2 点、竜佩型貝製垂飾 5 点、2 孔板状貝製品 9 点、マクラガイ珠 70 点、ヤコウガイ容器 3 点、太形ツノガイ珠 22 点、細形ツノガイ珠 988 点、ノシガイ珠 12 点、イモガイ珠 1855 点、貝鏃 2 点である。

写真 40　2005-2006 年度調査出土貝製品とガラス小玉

写真 41 は、南区で採集された貝符である。貝符は、すべてアンボンクロザメなどの琉球・奄美諸島産の大型イモガイの螺層を磨いたものである。

貝符は、上層期の墓に副葬された上層貝符と下層期の人骨がみにつけていた下層貝符に大きく分類される。

両者は機能にも差がある。下層貝符は、装身具として広田人が身につけていたもので、佩用ないしは綴じ付けのための孔が穿たれている。一方、上層貝符は無孔で、死者に副葬された明器である。

下層貝符に刻まれた文様は、今のところ日本列島に類例が認められず、文様の系譜を中国**大陸にもとめる考え方が有力である。**

写真 41　下層貝符と上層貝符

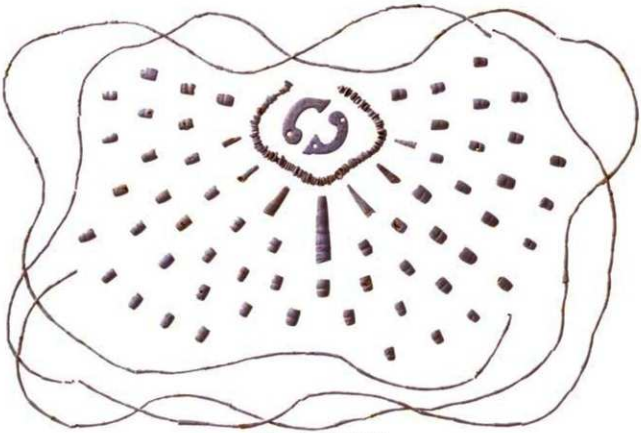


写真 42　南区 2 号墓出土貝製品

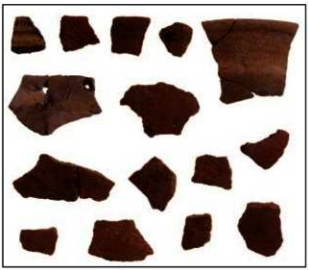


写真 43　南区出土の縄文後・晩期の土器

写真 44　南区採集貝製品

写真 42 は、南区 2 号墓の成人男性が身につけていた貝製装身具である。広田遺跡独特の貝製品である竜佩型貝製垂飾が 2 点、人骨の頸部付近より出土していて、出土状況からイモガイ珠、ツノガイ珠、マクラガイ珠などと連結して着用していたことがわかった。

マクラガイ珠は全部で 66 点出土しており、表面には線刻または列点文による単純な文様が施されていた。このマクラガイ珠の原貝は、黒住耐二氏によると、種子島近海でも採れるサラサマクラである。

写真 43 は、南区に砂丘が形成される以前に堆積した粘土層であるⅥ層から出土した縄文時代後・晩期の土器である。広田砂丘が形成された時期が、縄文時代後・晩期以降であることを物語る土器である。

小さな貝殖を連結させ、ネックレスやブレスレットなどのアクセサリーにして身を装うスタイルは、広田人が好んだファッションであったらしい。貝殖1点1点を数えると、広田遺跡から43,000点以上の貝殖が出土している。

写真45　南区出土貝玉類

写真 46　北区 2 号墓に供献された土器

1957-1959 年度の調査で、埋葬遺構にともない出土した土器はごくわずかで、しかも、全て在地でつくられた甕であった。大隅諸島で弥生時代後期から古墳時代併行期にかけてつくられた在地の甕（写真 48）は、細かな編年が確立されていないため、それだけでは、大枠でしか遺構の時期をしぼりこむことはできない。

今回の調査で、北区 2 号墓に供献されていた土器群（写真 46）のうち、中津野式（写真 47）は、南九州本土の土器型式で、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器である。

この土器の年代と、遺構内からサンプリングされた炭化物の C14 年代測定の結果から、北区 2 号墓は 3 世紀の墓であることがわかった。

写真 47　北区 2 号墓出土　中津野式壺（3 世紀）

写真 48　北区 2 号墓出土　在地の甕

写真 49　北区 1 号墓出土　オオツタノハ貝輪

北側墓群で出土した貝製装身具は、面取り加工の施された優美なオオツタノハ貝輪（写真 49）や貝玉を用いた装身具（写真 52）である。

写真 49 のオオツタノハ貝輪にみられる明瞭な面取り加工は、1957-1959 年度の調査でも数例しか確認されていない。

また、ヤコウガイ容器の副葬は、トカラ列島以南の地域との交流を物語っている。

北側墓群は、覆石墓制や土器の供献習俗などからは、中種子町島ノ峯遺跡に代表される種子島の在地の墓制の影響が看取されるが、広田遺跡を最も特徴づけている貝製品に視点をうつすと、南側墓群と共通する広田独自の貝文化をもつことがわかる。

写真 52　北区 3 号墓出土貝製品

写真 50　北区 1 号墓に副葬されたヤコウガイ容器

写真 51　北区 1 号墓出土磨製石鏃

写真 53　北区採集貝製品

広田遺跡は、鹿児島県種子島の南部、東海岸に面した全長約 100 メートル、標高 9 m の砂丘上に立地する。発掘調査は、まず 1957 年から 1959 年にかけて、遺跡の内容解明を目的とし 3 次にわたってなされ、2003 年度に詳細な報告書が刊行された。調査の結果、合葬を含む 90 箇所の埋葬遺構、157 体の人骨、44、000 点以上の貝製品が確認された。

出土人骨は、全員が過短頭で、生活習俗等による人工的な変形が加わったと想定されている。身長は男性が 154.0 ㎝、女性が 142.8㎝であり低身長の点と上顎片側の側切歯を抜歯する特異な風習を持つ点で日本列島の古代人では例を見ない。文化層は、上・中・下層の 3 層に分けられ、上・中・下層のおよその時期を、以下としている。

上層（上層期）　　：古墳時代後期（7 世紀を含む）
中層（下層期・新段階）：古墳時代中期
下層（下層期・古段階）：弥生時代後期後半～古墳時代前期

また人骨に伴い、奄美・沖縄諸島産の貝を素材とした貝輪や玉、幾何学文が彫刻された貝符や、竜佩型貝製垂飾など総数 44、242 点、総約 24kg にも及ぶ豊富で多彩な貝製品が出土した。出土品は、「鹿児島県広田遺跡出土品」として 2006 年 6 月 9 日に、国の重要文化財（考古資料）の指定を受けている。

2005-2006 年度の調査では、広田遺跡は縄文時代後期から近世にいたるまでの複合遺跡であることが判明したが、遺跡の主体は、弥生時代後期後半～古墳時代にかけての埋葬址である。1957-1959 年度の発掘調査において、遺跡は砂丘端の約 150㎡に存在する埋葬址であると判断されたが、今回の調査により、その範囲が陸側にさらに拡大すること、また、広田川に面した砂丘北端にも墓群の存在することが、明らかになった。このように広田遺跡は、砂丘の少なくとも二箇所に墓域をもつ埋葬址である可能性が高まった。一方、発掘調査に付随して実施した堆積学的調査により、二箇所の墓域が形成された当時、砂丘の南側・北側にはそれぞれ発達様式を異にする二つの高まり（砂丘頂部）が存在したことが明らかとなり、墓域の分布がこれらと対応していることから、砂丘の旧地形と墓群の形成に密接な関係があることが予想された。しかし両者の中間部分の状況の考古学的な調査は、今後の継続課題である。

南側墓群の 2005 年度から 2006 年度の調査で新たに確認した埋葬遺構は、下層期・古段階 2 基、下層期 5 基、下層期・新段階 1 基、下層期・新段階～上層期 2 基、上層期 1 基の合計 11 基である。これらは豊富で多彩な貝製品を伴う。また、未調査区内に少なくとも 20 基以上の埋葬遺構が残存し、1957-1959 年度に調査された 90 基のうち 20 基以上の埋葬遺構が完掘されずに、その一部が残存すると想定される。これらの数字を合計すれば、南側墓群には、121 基以上の埋葬遺構が伴い、うち 51 基以上の埋葬遺構が残存するとみられる。

北側墓群では、覆石墓 9 基を検出した。人骨は広田遺跡に典型的な貝製品を伴い、人骨の形質的特徴も南側墓群と共通する。覆石に供献された 2 個体の壺は、中津野式（南九州の弥生時代終末期～古墳時代初頭）であった。

北側墓群における地中レーダー探査では、埋葬遺構とみられる反応が複数の地点で確認され、この結果などから、未発掘区内に少なくとも 84 基以上の埋葬遺構が残存すると予想される。北側墓群の発掘調査で確認された 9 基と合計すると、北側墓群全体で少なくとも 93 基以上の埋葬遺構が残存すると予想される。また、南側墓群と合計すると、広田遺跡全体では 144 基以上の埋葬遺構が残存すると想定される。

大隅諸島でこれまで確認された同時期の埋葬址は、中種子町鳥ノ峯遺跡などで、等しく覆石墓であることを特徴とする。広田遺跡にも覆石墓は存在するが、むしろそれ以外の墓制が多く、広田遺跡はあきらかに在地の墓地とは異なる文化的特徴をもつ遺跡といっていい。その異質性は、貝符や竜佩型貝製垂飾など、豊富で多彩な貝製品にもっとも よく示されている。これら貝製品の素材の多くは奄美・沖縄諸島産の大型巻貝であり、広田人と奄美・沖縄諸島人との交流が文化の背景にあることは明らかである。しかし一方で広田人は種子島在地の土器を用い、九州との交流を示すガラス小玉や管玉、壺を用いるなど、多方向の交流のあったことをも伺わせる。また広田人は人類学的に顕著な地域的特色をもち、日本人の形成を解明する上で不可欠な資料である。広田遺跡は日本文化形成過程の多様性を理解する上に重要な位置を占めているといえる。

引用・主要参考文献

金関丈夫　1964『種子島広田遺跡の文化」『発掘から推理する』雄山閣

金関 恕他　2003『種子島広田遺跡』広田遺跡学術調査会ほか

木下尚子　1996c『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版

木下尚子　2003「東アジアの貝珠文化」「東アジアと日本の考古学Ⅱ　交流と交易」

木下尚子　2004「種子島の貝製品・貝文化」「考古資料大観　12　沖縄貝塚時代後期　小学館

木下尚子　2005「貝交易からみた貢文化接触」「考古学研究」52－2（206 号）考古学研究会

国分直一　1972a「南島における彫刻骨器と貝殻－特に南島的意義をもつと見られる装飾品」「日本民族文化の研究　考古民族叢書」7　慶友社

国分直一　1972b『南島先史時代の研究　考古民俗叢書」10　慶友社

新里貴之　2004「沖縄諸島の土器」「考古資料大観　12　沖縄貝塚時代後期」　小学館

新里貴之　2005「南西諸島における先史時代の暦制（1）－大隅諸島－」「地域政策科学研究」第 2 号　鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

中園聡　1992「これは山の字ではない - 考古学的解釈の性質について -」「人類史研究」第 8 号

中村直子　2004「貝殻時代後期土器と貝符」「奄美ニュースレター NO.2」鹿児島大学

新田　栄治　1984「鷹南・奄美・沖縄諸島出土の貝符と蛟様」「南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究」鹿児島大学法文学部考古学研究室

新田　栄治　1991「貝符蛟様の型式学」「交流の考古学」肥後考古第 8 号　肥後考古学会

石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎　2006「広田遺跡 - 平成 16 年度～平成 18 年度町内遺跡等発掘調査事業 -」「南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書 (15)」南種子町教育委員会

2004-2006 年度広田遺跡発掘調査　概要報告書

発行日　2008 年 3 月
発行者　南種子町教育委員会
〒 891-3792
鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1
TEL 0997-26-1111
印刷所　有限会社　種子島新生社印刷
〒 891-3101
西之表市西之表 16736-1
TEL 0997-22-0476

2004年度～2006年度
町内遺跡等発掘調査概要報告書

廣田遺跡

鹿児島県南種子町教育委員会